



中村俊定文庫  
文庫 18  
181



おのゝ

序

目乃まふあをむかしく観たをりけ  
うよ乃世乃あさうらふぬたり四王乃月切  
利乃むいうてり果乃たうらふさおあふ  
そまいたらあをりらあとし何とら虚とさ  
めじらあふ江た氏木翁先生長等ふ下  
乃産し世十ともあふうあやたりりり祇  
原芭蕉の門ふ入る喜凡後南あ通り  
耳の雲心骨あふて終ふ畫法探か神  
小入志うもらまこと業とともあわ  
家父道とつて入る木に天と捨の茶棚  
小培てとてふ切園と露園ふまらるる



泉石煙霞乃病ふたつと古たきし  
まろりて塵とるあり溜と加ふるあり  
雲乃病と伯す一と羨子う良茶の  
辛澁乃一和ふ託しふ忘梅と題を  
予ふ序と請つたなり情  
と薄言と綴つて批ふ段にふり物  
衣翁野乃をそと境中を不乃句を  
小  
と其角何某の許るを書るを  
情ふ其の懐中をたそさうりさう乃湘  
臣洞血維乃わらり物と  
似りつふ人あましく唯とささ乃いた

ととてしやうらあん悲一さう子道と  
一秋葉泉乃空とそたきるる因入  
寧院乃二龍追悼乃教句と粧ひと  
梓小彫を志るるゆりけ書乃序  
と予小需む同く辞し  
と托乃まへ小葛屋乃曲調歌ふ  
先醒乃羨る一毛いす拳揚一旱

享保七歲舎壬寅十月  
蕉門一老  
千那



題辭



夕氣乃さうり女をゆる老乃秋  
まのふ木槿ふの鶴息をさきり

け二章の先師尚白老人乃病中乃吟  
ありし月を日乃命終小蝕を祓  
とそふけ世をさるるたさ小人をさ  
世乃句と案し天心と字をさ小  
あつなげ二句を所終乃さこ小見  
こころをさる乃門人少強一あまの  
燕上乃家乃神ふあやう葛葉乃花  
乃似ふをさるさる哀挽乃詞と

叙ふ例し夕龍奇少といふ

鳴あつと和為乃墓乃虫乃表  
 津や水月いさせし終乃之  
 つまら業乃十日みくこ 龍  
 世信やさて赤中を給ふ之垢世界  
 子孫所ぬ多賀の草表の玉代の聖  
 白一とく大津乃切龍世不地ん  
 龍身や遅き天智乃草履反  
 老赤乃柳あつてしちふりり  
 下分龍乃古さ龍やちる柳  
 ろと白一とく大津乃高龍  
 千那 正秀 角上 松琵琶 仙露 善血 沽徳 百星 琴下爪 沽例

七月乃人を問るや 水次手  
 指さともぬあつとや彼氏小龍燕  
 焼香やか乃ふ業乃白よとさ  
 貞依 高川 灣例

莫立章

維明

新白乃龍さへひりくく邪  
 小乃業乃子孫あきかたう  
 吾乃照羽草屋乃約龍身  
 物と吹やまはくくあつて  
 著くくもぬつても木工乃其白  
 三日乃市乃所て 賦  
 辜陀 秋矣 表立 利角 白風

ら  
種口古ととりのつる琴の銘板存 圓入



母やちりぬし辞して夜をていとく津の  
干乃病ゆらぬをこ武城ゆせり  
忽あをの根をたけり移り色玉の  
深川乃枯あをの流年京極家乃技  
ゆと之形く舟移り  
昔書乃世もあやうく只湖氣乃月  
小味杯師の他種不入く五十年始  
小洛乃貞室とくい羊の原不卜小立  
とよほの芭蕉乃翁乃白は小麻藤七  
名を境あけ贅一し故為の白は乃大  
祖二千余人乃のあけり中乃一人小  
しと上小具角の流るる未九北小而小  
荷乃越人野乃松乃徒るく么一の

上翁幸勝乃松の勝と吟り師の北宗  
乃眺しをたけり自奥羽とくまの松と  
本多幸子に体あけり此つとくい  
乙列西秀評六洒堂乃徒の師乃門とく  
出く翁小渴とく乃つひと乃身を  
あけりやつねにたのしき先生と吟師  
あけり花乃下小美とく月乃あ小  
一曲を祀して老とく茶の羊百之言  
一心入茶何人是咄雪月爪花と備し  
く小遠列乃心養あけり富旦乃代と  
くいその茶あけりくは投入り  
小性ときとく炭あけりく老古茶  
と歌ひ和漢乃骨血と賞一とと松



中と極くわきふ乃不に化あり一之縁乃此  
門人旭昔方つとるあ小人間乃四月と化を  
りしとら初終ふとる入とる乃山乃とるせし  
毛ふいその里乃極極も高くとる一とる  
空乃一とる武知乃川道遠に百里琴  
爪小あささるこれ初昔乃分と吐やりわ  
るそ代とるまの尾張乃流川伊也乃同友  
小物とるもあ考いふ一この伴まるとる  
い惟然にこり九死とらをけらまて程遠  
乃素堂本因乃反に堂廿乃門と致く  
そ乃余乃此士之爰小之そ何ととる物と  
宛聞とすまらふ似し師あまて小七  
十有金おし流乃乃か一官ふとるも不易

乃大人うらも身健みし眼に月をふさ  
一耳小せお乃かきとるあも皇甫  
謚ウ痺る相如乃湯あふふとわしれく  
踵痛くふふとら乃乃左乃  
咽小痛くふふとら乃乃左乃  
さしとらや例乃乃痛いふれと止ぬ  
とるそ乃乃程あしとる一つにこまとる  
とるそとらしとるあ所の代も何とま  
臣補の代あは程心つとるあまに杜預ウ  
癖とら乃や標の星ウ知左裏乃あつと  
とるそ或はに真一あつとるあむりとる  
去年乃秋齋賢行の一字とる水く自老齋  
子と呼し後とるあま乃あつとる









折子行後小引之乃條

白

老齋貝子臨嗟人情吟我物態多季子  
茲無臨其終也有言用卷二言十是也  
於是友人門生成遠或近皆為歌  
寄哀以憫其長逝僕等繕寫成  
篇刊行四方亦圖之之所不可不  
聲者也

享保七年龍集壬寅十月日門人  
百老齋寧陀  
二月坊園人謹識

